

## 「華嚴經」と教育（六）

古田 榮 作

### 要 旨

五十余人の善知識を訪問し、信仰を深めた善財童子は、愈々彌勒菩薩の所にやってくる。

善財は彌勒に「どのように菩薩は菩薩行を学び菩薩道を修められるのでしょうか。お教えください」と懇願すると、彌勒は大樓観にいた大衆の前で「この童子は、不退轉の心で厭きることなく勝れた法を習得しようとして、善知識を求め、親近し供養し法を聞き受持しようとしてきた。この童子は、かつて頻陀伽羅城で文殊師利の教えを受けて、善知識を求め、多数の善知識に菩薩行を問い、心に疲倦無く、とうとう私のところにやってきた。この童子のように大乘を学ぶものは甚だ稀有である。」と善財を讃えた上で、「このように学ぶ者は、則ち能く菩薩所行を究竟する。大願を成満し、佛菩提に近づき、一切利を浄め、衆生を教化し、深く法界に入り、一切の諸波羅蜜を具足し、菩薩行を広め、一切の諸善知識に値遇し、生涯に能く普賢菩薩諸行を具えるであろう。……」と善財の成道の近いことを宣言し、文殊師利に諸の法門と、智慧の境界と、普賢の所行を問うよう勧めるが、善財の更なる菩薩の行を学び、菩薩の道を修する方法の問いにあなたは文殊師利をはじめとする善知識に遇うこともでき、それなりの器の持主でもある。善知識の教える所は諸佛を護念することである。悟りを求める気持である、菩提心は諸佛の種子であり、良田であり、大地であり、浄水であり、……と諭し、善財の成道への大願が不退轉のものであるとして、大樓観の中に導き入れられる。樓観の中で自分自身の姿を見るとともに佛の描かれた世界が現出していた。その中で深い三昧に耽つてしていると彌勒は指を弾き、善財を三昧から覚醒させてお主は菩薩の神力をすべて目の当たりにしたと告げられ、彌勒の示した法門は「入三

世智正念思惟莊嚴藏法門」であると示され、菩薩の十種の生處を示され、その上あなたが先ほど目にしたすばらしい光景は文殊師利の威神力によるものであるとも告げられ、普門城に詣ると文殊師利は手を差し伸べて「でかしたぞ善財、若し信心の根を離れば憂悔に埋没してしまふであろうし、功德が具わらねば精勤しようとする心も失せてしまふであろうし、多少の功德に満足しようものならそれで進歩は止まってしまったであろうに……」と善財の精進を讃え、更にすべての法門、大智光明、菩薩陀羅尼、無量三昧、無量智慧をお主は成就したので、普賢の所行の道場へ入らせるようにした。普賢菩薩は、一つ一つの毛孔より光を放ち、世界を照らし、衆生の苦患を除滅して菩薩の善根を出し、……とさながら盧舎那如来の光の世界を現せられる光景に接した。この光景を目の当たりにして善財は不可壞智慧法門をわがものにした。普賢菩薩は、「私は測り知れないほどの長期間に亘って菩薩の道を修め、菩提を求め続けてきた。その功德で不壞の清淨なる色身を得たので、私の名を聞き、私の姿を見たものは必ず清淨の世界に往き、清淨なる身になるであろう」と諭し、普賢の現じた光の世界に觸れた善財の成道も実現したのである。「譬如工幻師 能現種種事 佛爲化衆生 示現種種身」とされるのであり、「聞此法歡喜 信心無疑者 達成無上道 與諸如来等」と結語する。

善財の求道は師・善友（善知識）を訪ねて教えを請い、その教えを通じて信を深めていくものであったが、ゴータマ・ブツダの場合は、修行法・瞑想法を学ぶための師は求めたが、師と仰ぐ師は見当たらない。瞑想し、思惟することを通じて人生の悩みの解決をはかり、苦行による悟りから離れ、悟りへの障りとなる欲望、嫌悪、飢渴、妄執、ものうさ・睡眠、恐怖、疑惑、みせかけ・強情・名声と他人の蔑視という悪魔を斥けてきたのである。善財の修行の姿には懈怠も見られず、苦惱も見当たらない。經典の中で理想化された修行者の姿と生身の人物？との差異が表れているように思われる。

佛教では勤習・数習・薰習という語を重要視する。それは「諸惡莫作 諸善奉行 自淨其意 是諸佛教」を求める。なにげない行動の中に自ら善に趣き悪を避ける、身に染み付いた智慧の習得を求めているものであろう。

キーワード…善財童子 文殊師利菩薩 普賢菩薩 教育

これまでの五回の考察で、華嚴經の描いている世界観、すなわち第一は、「心如工畫師　畫種種五陰　一切世界中　無法而不造  
 如心佛亦爾　如佛衆生然　心佛及衆生　是三無差別　諸佛悉了知　一切從心轉　若能如是解　彼人見眞佛」<sup>(1)</sup>との「唯心偈」  
 と「三界虛妄。但是心作。十二緣分。是皆依心。」<sup>(2)</sup>に示される「存在するものは、すべて心の表れである」という思想であり、二番目は  
 「不可思議　一毛孔中　無量佛刹　莊嚴清淨　曠然安住　彼一切處　……於一塵内　微細國土　一切塵等　悉於中住」<sup>(3)</sup>と  
 か「知微細世界即是大世界。知大世界即是微細世界。……知無量無邊世界即是一世界。知無量無邊世界入一世界。知一世界入無量無邊世界。  
 ……發阿耨多羅三藐三菩提心。……欲知長劫即是短劫。短劫即是長劫。知一劫即是不可數阿僧祇劫。不可數阿僧祇劫即是一劫。知一切有佛  
 劫。知一切無佛劫。……知無量劫即是一念。知一念即是無量劫。知一切劫入無劫。知無劫入一切劫。欲悉了知過去未來際及現在一切世界劫  
 數成敗故。…發阿耨多羅三藐三菩提心。」<sup>(4)</sup>とする世界観であり、第三に「初發心時便成正覺。」<sup>(5)</sup>という教説に代表される「初めが終り」との  
 思想を概観した上で、「華嚴經」の最後に置かれている「入法界品」での覺城の東の莊嚴幢娑羅林の大塔廟にいた二千人もの信者、童子・  
 童女の中で説法をしようとした文殊師利は善財童子に注目した。文殊師利の教えを聞いた善財童子は、南方へ遊行する文殊師利に付き従っ  
 て教えを求めたが、文殊は、善知識を求めて親近し恭敬し供養して、菩薩の行とは何かということを教えてもらいなさい、と告げ、善財童  
 子に可樂國の功德雲比丘を訪ねるよう勧める。善財童子の成道のために訪れた善知識は五十余人であるが、菩薩・夜神、地神・比丘・比丘  
 尼・優婆夷・仙人・王・長者・婆羅門・海師・童子・童女など様々であり、中には婆羅門ばかりでなく外道とされる者もあり、売笑婦とま  
 がうような一緒に宿泊し、顔を見、抱擁し、接吻することにより忘我の世界に入ることができるとされる善知識も加えられていた。善知識  
 から教えを受け、思索することにより信を深めて来た善財童子は、愈々、最終の教えを乞うべく彌勒菩薩を訪ねる。  
 善財童子の求道の旅は愈々佳境に達する。すでに彼が訪問した善知識は五十余人、残るは、彌勒菩薩、再度訪問することになる文殊師利  
 菩薩、及び普賢菩薩である。徳生童子・有徳童女の勧めで、釋尊がさとりをひらかれた場所である、海潤國の大莊藏という名の園林の中の  
 嚴淨藏という名の大樓觀に住まわれておられる彌勒菩薩を訪問しようと足を向ける。海潤國への途上、善財は「以過去際修身業力。及清淨  
 心。遠離惡行。超出世間虛妄惑倒。求佛法實義。長養諸根。滿足大願具精進力。不惜身命饒益衆生。修菩薩行積集佛法。見諸如來淨一切刹。  
 供養法師護持正法。成就菩薩諸淨願身。善知緣起。修習不可思議善根。」<sup>(6)</sup>と思念をなし、「淨心信敬一切菩薩。如世尊想。修習諸根心不顛倒。

正念恭敬離世間想滿足諸願。出生無量菩薩化身。讚歎三世一切諸佛菩薩法門。智慧覺悟如來菩薩一切至處自在神力。乃至一毛孔中佛菩薩身。皆悉充滿無礙智眼。觀十方法界及虛空界三世諸法。爾時善財。如是恭敬供養。具諸願忍。以無量智觀境界地<sup>(7)</sup>。との境地に達し、ついに大樓觀の前に至る。そこで善財は五體敬禮をして、次のように考えた。「此は諸佛菩薩諸善知識。是諸佛塔。是如來像。諸佛菩薩法寶住處。是聲聞緣覺。亦是其塔。此是衆聖。亦是父母。亦是福田。此是一切法界境界。作是念已。又復等觀猶如虛空。等觀如法界無有障礙。等觀如實際至一切處。等觀如如來。……<sup>(8)</sup>」と認識し、彌勒菩薩を讚嘆して偈で「安住大慈心 彌勒摩訶薩 具足妙功德 饒益諸群生 住於灌頂地 諸佛之長子 思惟佛境界 安住此法堂 ……」<sup>(9)</sup>と詠つてその門の下に立つと、遙か彼方より彌勒菩薩が数多の天龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人・非人等の大衆に圍遶されてやって来られた。善財は「云何菩薩學菩薩行修菩薩道。既修學已。具一切佛法。隨所請衆生悉令度脫。成就大願。究竟一切菩薩所行。安慰一切諸天世人。不負本心。不違三寶。不欺天人。不罔衆生。不斷佛種。持菩薩家如來正法。如是等事。唯願演說。」<sup>(10)</sup>と彌勒に尋ねる。彌勒は大衆を觀察し善財を指して「汝等見是童子問菩薩行具足一切功德者不。此童子者。勇猛精進專求實義。以正直心得不退轉。常修勝法心無厭足。如救頭然。求善知識。親近供養聞法受持。此童子者。昔於頻陀伽羅城。受文殊師利教。求善知識。展轉經由一百一十諸善知識。問菩薩行。心無疲倦。次來我所。如是童子學大乘者。甚爲希有。」<sup>(11)</sup>と善財を讚え、更に「若有菩薩。如是學者。則能究竟菩薩所行。成滿大願。近佛菩提。淨一切利。教化衆生。深入法界。具足一切諸波羅蜜。廣菩薩行。畢本意性。出於魔業。值遇一切諸善知識。於一生中。能具普賢菩薩諸行。此童子者。入威儀海諸智慧海。修菩提海菩薩行海。成滿一切諸佛願海。詣諸刹海見諸佛海。入眷屬海行供養海。聞正法海飲妙法海。成滿一切菩薩力海。顯現一切自在力雲。一切衆生無不見者。滅一切煩惱處。入一切佛處。入諸法門處。入諸三昧處。住諸通明處。遊行法界處。如日月出照一切衆生處。不依諸相如空中鳥。常樂寂靜無壞法門。遍遊因陀羅網世界諸佛世界。如風無礙。深入法界。現諸世間。見三世佛。心大歡喜踊躍無量。隨諸佛教。爲聖法器。得諸法門。具菩薩行。現自在力。」<sup>(12)</sup>と周りの者に示した上で、善財の求道を「汝今得最大利。於無量劫難聞見者。汝悉聞見知彼功德。」<sup>(13)</sup>と褒め、「善財。汝今皆得成就。聞諸佛法行菩薩行。其有衆生。聞是行者。得大善利成滿大願。親近諸佛。爲佛眞子。必成佛道清淨解脫。除滅諸惡遠離衆苦。積功德聚清淨法身。遊行十方。見諸如來菩薩大衆。長養善根如水蓮華。值遇諸佛聞持正法。安住佛道具諸佛願。究竟諸佛功德彼岸。」<sup>(14)</sup>と善財の修道が最終段階に達しようとしていることを告げた上で、再度、文殊師利に諸の法門と、智慧の境界と、普賢の所行を問う

べきだと告げる。善財は今一度彌勒に菩薩の行を学び、菩薩の道を修するかを尋ねる。彌勒は善財の徳行を讃えた上で、「童子。乃能發阿耨多羅三藐三菩提心。專求一切佛法。饒益一切世間。救護一切衆生。善男子。汝得善利。人身壽命。值遇諸佛。得見文殊師利大善知識。汝爲法器。善根潤澤。長清白法。淨勝欲性。爲善知識之所總攝。諸佛護念。何以故。菩提心者。則爲一切諸佛種子。能生一切諸佛法故。菩提心者。則爲良田。長養衆生白淨法故。菩提心者。則爲大地。能持一切諸世間故。菩提心者。則爲淨水。洗濯一切煩惱垢故。菩提心者。則爲大風。一切世間無障礙故。菩提心者。則爲盛火。能燒一切邪見愛故。菩提心者。則爲淨日。普照一切衆生類故。菩提心者。則爲明月。諸白淨法悉圓滿故。菩提心者。則爲淨燈。普照一切諸法界故。菩提心者。則爲淨眼。悉能親見邪見正道故。菩提心者。則爲大道。皆令得入一切智城故。菩提心者。則爲正濟。悉令得到出要處故。菩提心者。則爲大乘。容載一切諸菩薩故。菩提心者。則爲門戶。令入一切菩薩行故。菩提心者。則爲宮殿。安住修習三昧法故。菩提心者。則爲園觀。於中遊戲受法樂故。菩提心者。則爲勝宅。一切衆生所歸依故。菩提心者。則爲依止。因修一切菩薩行故。菩提心者。則爲守護。能滿菩薩諸大願故。菩提心者。則爲慈母。增長一切諸菩薩故。菩提心者。則爲養育。守護一切諸菩薩故。菩提心者。則爲善知識。離一切惡諸恐怖故。菩提心者。則爲大王。勝諸聲聞緣覺心故。菩提心者。則爲最勝。成滿一切無比願故。菩提心者。則爲大海。悉能容受諸功德故。菩提心者。則爲須彌山王。等觀衆生心不動故。則爲金剛圍山。攝持一切諸衆生故。菩提心者。則爲雪山。長養智慧清涼藥故。菩提心者。則爲香山。出生一切功德香故。菩提心者。則爲虛空。諸妙功德無邊際故。菩提心者。則爲蓮華。不染一切世間法故。菩提心者。則爲寶象。悉能調伏一切根故。菩提心者。則爲寶馬。遠離諸惡龍候法故。菩提心者。則爲調御師。悉能守護摩訶衍故。菩提心者。則爲良藥。療治一切煩惱病故。菩提心者。則爲沃焦。消盡一切不善法故。菩提心者。則爲金剛。壞散一切諸惡法故。菩提心者。則爲和香。出生一切功德香故。菩提心者。則爲妙華。一切世間所愛樂故。菩提心者。則爲白梅檀。除滅五欲諸熱病故。菩提心者。則爲樂器。微妙音聲聞法界故。菩提心者。則爲勇健。摧滅煩惱諸怨敵故。菩提心者。則爲善鏃。拔出一切煩惱刺故。菩提心者。則爲莊嚴具。嚴飾一切諸菩薩故。菩提心者。則得爲火災。焚燒一切有爲法故。菩提心者。則爲無壞藥王樹根。長養一切諸佛法故。菩提心者。則爲龍珠。除滅無量煩惱毒故。菩提心者。則爲水珠。淨諸心垢煩惱濁故。菩提心者。則爲如意珠。具足一切功德利故。菩提心者。則爲天德瓶。滿足一切所欲樂故。菩提心者。則爲劫初樹。出生一切莊嚴具故。菩提心者。則爲恒娑衣。不受一切諸塵垢故。菩提心者。則爲正業。本性淨

故。菩提心者。則爲利犁。修治一切衆生田故。菩提心者。則爲那羅延箭。悉能鑿徹身見鎧故。菩提心者。則爲厭離。決定了知苦患相故。菩提心者。則爲利稍。能刺一切煩惱賊故。菩提心者。則爲甘露雨。能滅一切煩惱火故。菩提心者。則爲利劍。斬除一切煩惱惡故。菩提心者。則爲金椎。壞散一切憍慢山故。菩提心者。則爲利刀。斬截七使煩惱鎧故。菩提心者。則爲勇健幢。傾倒一切諸魔幢故。菩提心者。則爲斫斧。斫伐無知諸苦樹故。菩提心者。則爲器械。防護一切諸艱難故。菩提心者。則爲善手。防護一切諸度身故。菩提心者。則爲妙足。安立一切諸功德故。菩提心者。則爲眼藥。除滅一切無明瞶故。菩提心者。則爲善拔刺。悉能拔出身見刺故。菩提心者。則爲安穩床故。除滅一切生死苦床故。菩提心者。則爲善友。度脫無量生死難故。菩提心者。則爲善利。遠離一切衰耗法故。菩提心者。則爲天人師。善知菩薩出要道故。菩提心者。則爲寶藏。無量功德不可盡故。菩提心者。則爲涌泉。清冷智慧無窮盡故。菩提心者。則爲淨鏡。顯現一切諸法門故。菩提心者。則爲淨池。洗濯一切諸垢穢故。菩提心者。則爲大河流。引諸度四攝法故。菩提心者。則爲龍王。悉能普雨甘露法故。菩提心者。則爲命根。任持菩薩大悲法故。菩提心者。則爲甘露。能令安住不死法故。菩提心者。則爲羅網。網取一切所應化故。菩提心者。則爲善絹。攝取一切諸衆生故。菩提心者。則爲鈎餌。釣出生死淵居衆生故。菩提心者。則爲阿伽陀藥。除滅一切諸惡患故。菩提心者。則爲波羅提毘叉藥。悉能療治五欲毒故。菩提心者。則爲大地。消滅無量邪想水故。菩提心者。則爲風輪。壞散一切障蓋故。菩提心者。則爲寶洲。出生道品功德寶故。菩提心者。則爲種性長養一切白淨法故。菩提心者。則爲居宅。納受一切功德寶故。菩提心者。則爲大城。菩薩商人所在處故。菩提心者。則爲金藥。消煩惱垢令清淨故。菩提心者。則爲香蜜。具足一切功德味故。菩提心者。則爲正道。令入一切智城故。菩提心者。則爲寶器。容受一切白淨法故。菩提心者。則爲時澤。悉能除滅煩惱塵故。菩提心者。則爲安住。出生菩薩之所住故。菩提心者。則爲壽行。不取聲聞諸解脫故。菩提心者。則爲琉璃寶。其性清淨無垢濁故。菩提心者。則爲伊尼羅寶。勝諸聲聞緣覺智故。菩提心者。則爲法鼓。覺悟煩惱長寢衆生故。菩提心者。則爲淨水。其性清淨無垢濁故。菩提心者。則爲閻浮檀金。令有爲善如聚墨故。菩提心者。則爲山王。超出一切諸世間故。菩提心者。則爲歸依。悉能救護諸衆生故。菩提心者。則爲實義。遠離一切虛妄法故。菩提心者。則爲無上寶。悉令歡喜得滿足故。菩提心者。則爲大會。隨彼所須令充悅故。菩提心者。則爲尊長。於諸衆生無倫匹故。菩提心者。則爲寶藏。受持一切諸佛法故。菩提心者。則爲因陀羅網。攝諸煩惱阿修羅故。菩提心者。則爲毘樓那風。震動教化衆生心故。菩提心者。則爲因陀羅火。焚燒一切煩惱習故。菩提心者。則爲無上塔。一切天人應供養故。佛子。菩提心者。如是無量功德成就。悉與一切諸佛菩薩諸功德等。何以故。因菩提心。出生一切諸菩薩行。三世諸佛成正覺。

故。」<sup>(15)</sup>とさとりを求めて發心することが種子であり、衆生の白淨の法を長養する良田であり、……菩提心によって一切諸の菩薩の行を出生し、三世の諸佛正覺を成じたまうのであるからと、初發心の効用をくどいほどに解き明かし「汝今入是明淨莊嚴藏大樓觀者。則能了知。學菩薩行修菩薩道。具足成就無量功德。」<sup>(16)</sup>と示す。善財の「唯願大聖。開樓觀門令我得入。」<sup>(17)</sup>との要請で彌勒が指を弾くと門は開き、善財が入ると閉まったのである。樓觀は虚空の如く广大で、衆寶を地として、無数の窓牖があり、欄楯は七寶で作られ、無数の幡幢が蓋を飾り……とあたかも極樂淨土の中にいるかのようなのであった。彌勒の神通力により「諸樓觀中自見其身。又見無量自在神力不思議事。或見彌勒隨本種姓。壽命知識。長養善根。諸劫世界。一切佛所及諸眷屬。因諸大願。初發阿耨多羅三藐三菩提心。或見初得慈心三昧因以爲名。或見彌勒行菩薩行。滿足一切諸波羅蜜諸忍諸地。……見一一毛孔中。出一切衆生等化身雲。或出菩薩法門。所謂讚歎菩提心功德門。檀波羅蜜門。乃至願波羅蜜門。四攝諸禪無量三昧。通明總持諸諦諸辯。止觀解脫緣起。念處正勤神足根力覺道。聲聞緣覺二乘所行。菩薩大乘諸地諸忍。菩薩願行。現如是等一切法門。或於樓觀見諸如來大衆圍遶。又知諸佛家族不同種姓不同。其身壽量劫刹。教授無量法門。正法住世。分別了知皆悉不同。爾時善財。諸樓觀中見一樓觀。高廣嚴飾勝妙於前。包容三千大千世界。百億閻浮提。百億兜率天。菩薩命終降神。受胎出生。遊行七步。觀察十方大師子吼。帝釋梵王恭敬奉侍。現童子身處宮殿中。出遊園觀。以薩婆若心出家苦行。現受乳糜。往詣道場降伏衆魔。觀菩提樹轉正法輪。昇天宮殿。方土劫數眷屬壽量。行菩薩行滿足大願。演說正法教化衆生。現分舍利皆悉不同。爾時善財。自見己身在諸佛所。見如是等諸奇特事。又聞樓觀諸金鈴中。出不思議微妙音聲。所謂初發菩提心聲。菩薩所行諸度願聲。恭敬供養不可思議諸佛音聲。淨佛刹聲。佛法雲聲。諸莊嚴具。亦出如是微妙音聲。……聞如是等不可思議微妙音聲。身心柔軟歡喜無量。即得無量陀羅尼門辯才門忍門精進門大願門通明門智慧門解脫門波羅蜜門三昧門。」<sup>(18)</sup>「爾時善財。於寶鏡中見諸如來及其眷屬。諸大菩薩聲聞緣覺。淨世界。不淨世界。雜世界。或世界有佛。或世界無佛。或上中下世界。或有世界如因陀羅網。或有纏覆仰伏世界。又復觀見平正世界。悉分別知五道別異。又見無量阿僧祇諸大菩薩經行禪定觀察諸法。發大悲心普覆衆生。造種種論辯衆義趣。或書經卷。或問或答。或見出生三種迴向及諸大願。悉皆觀見如是等事。又見諸寶柱中。普放無量青黃赤白淨玻瓈色。……或教衆生三歸五戒八齋十善。出家學道聞法受持。正念思惟住菩薩心。又見彌勒於無量劫行六波羅蜜化衆生事。又見彌勒無量劫中諸善知識。」<sup>(19)</sup>彌勒は善財に樓觀の中で、眞の自己の姿を見たか、また諸の大菩薩の不可思議な自在力を見たかどうかを質し、善財は見ましたと答える。經は十喻を挙げ、善財の深い禪定に入る。彌勒は指を弾き、善財を禪定から覺ますと、「汝觀

見此菩薩神力自在大願功德依果。菩薩莊嚴修習奇特。諸深妙行出生死道。一切法門無量莊嚴。諸佛大願不可思議。菩薩三昧如是等事。汝悉見不。善財答言。唯然已見。蒙善知識威神力故。爾時善財。白言大聖。此何法門。答言。入三世智正念思惟莊嚴藏法門。善男子。一生菩薩得如是等不可說不可說法門。大聖。此諸奇特妙莊嚴法從何所來。答言。菩薩神力之所出生。而亦不在神力之中。不來不去無積聚處。譬如龍雨不從身心。但以發意欲雨則雨。然彼境界不可思議。善男子。此諸奇特妙莊嚴法亦復如是。無所從來。但以菩薩神力出生。善男子。譬如幻師現種種事。無來無去。但以幻力現種種事。此諸奇特妙莊嚴法亦復如是。無來無去。無住無著。不生不滅。但學菩薩智願力故。現如是事。爾時善財。白言大聖。從何所來。答言。佛子。菩薩無來趣。無行住趣。無所著趣。不生不死趣。不往不至趣。不離不起趣。不捨不著趣。無業無報趣。無起無依趣。不常不斷趣。善男子。菩薩但爲教化救護衆生。從大慈悲來。滅衆生苦故。從菩薩淨戒道來。隨其所樂自在生故。從菩薩大願道來。本發意故。從菩薩神通道來。滅衆生苦住佛所故。從菩薩無增損趣來。不失身心諸善業故。從菩薩慧方便來。隨順一切衆生類故。從菩薩化身趣來。如電鏡像故。善男子。汝所問我何所來者。我從生處摩離國來。彼有聚落。名曰樓觀。有長者子。名瞿波羅。我爲說法令立菩提。我本生處諸群生等。隨所應化而爲說法。亦爲父母及諸親屬。隨應說法安立大乘。而來至此。<sup>(21)</sup>との問答の後、善財の菩薩の生處はこの問いに「菩薩有十種生處。何等爲十。所謂菩提心是菩薩生處。生菩薩家故。正直心是菩薩生處。生善知識家故。安住諸地是菩薩生處。生諸波羅蜜家故。出生大願是菩薩生處。生菩薩行家故。大悲是菩薩生處。生四攝家故。眞實觀法是菩薩生處。生般若波羅蜜家故。摩訶衍是菩薩生處。生方便波羅蜜家故。教化衆生是菩薩生處。生菩提家故。智慧方便是菩薩生處。生無生法忍家故。隨順諸法是菩薩生處。生三世諸佛家故。善男子。菩薩摩訶薩。以般若波羅蜜爲母。大方便爲父。檀波羅蜜爲乳。尸波羅蜜爲乳母。屢提波羅蜜爲莊嚴具。毘梨耶波羅蜜爲養育者。禪波羅蜜爲潔淨。善知識爲師。菩提分爲朋友。一切善根爲親族。一切菩薩爲兄弟。菩提心爲家。如說修行爲家地。菩薩所住爲家處。菩薩忍法爲豪尊。出生大願爲巨富。具菩薩行爲順家法。讚摩訶衍爲紹家法。甘露灌頂一生菩薩爲王太子。能淨修治三世佛家。……汝今往詣文殊師利問。云何菩薩學菩薩行修菩薩道。具足成就普賢所行。彼當爲汝分別演說。何以故。文殊師利。滿足無量億那由他菩薩願行。常爲無量億那由他諸佛之母。又爲無量億那由他諸菩薩師。勇猛精進教化衆生。名稱普聞十方世界。常於一切諸佛衆中爲大法師。悉爲諸佛之所讚歎。安住甚深智慧法門。分別了知一切法界。於無量劫修諸法門。究竟普賢菩薩所行。善男子。文殊師利是汝善知識。能令汝得生如來家。長養善根積功德聚。能示語汝諸善知識滿足大願。顯現一切菩薩不可思議功德。是故善男子。汝應一心尊重恭敬往詣其所。何以故。汝先所見諸善知

識。修菩薩行滿足大願得諸法門。皆由文殊師利威神力故。」<sup>(22)</sup>この勧めにより善財は百余の城を經由して普門城に到ると文殊師利は手を差し伸べて善財の頭を摩で、「善哉善哉。善男子。若離信根憂悔心沒。功行不具退失精勤。於少功德便以爲足。於一善根。心生住著。不善發起菩薩行願不爲善知識之所攝護。不爲如來之所憶念。是等皆悉不能了知。如是法性如是理趣。如是所行如是所住。若周遍知若種種知。若蓋原底若漸趣入。若解說若分別。若證知若獲得。皆悉不能。」<sup>(23)</sup>と言葉を掛ける。この文殊師利の教誨は善財を歡喜踊躍させ、「令得成就阿僧祇法門。得無量大智光明。無量菩薩陀羅尼。無量大願無量三昧。無量神通無量智慧。皆已成就。復令得入普賢所行道場之内。既置善財自所住已。文殊師利還攝不現。於是善財得見三千大千世界微塵等諸善知識。不違其教。增長薩婆若大慈悲藏。以淨慧眼普觀衆生。安住菩薩寂靜法門。分別了知諸法境界。入佛甚深大功德海。具解脫道長養精進。爲薩婆若修正直心。入於三世甚深法海。隨順諸佛清淨法輪。現入諸趣。於一切劫修菩薩行。滿足大願。明淨慧光照一切智境。淨菩薩根。以淨慧光除愚癡翳。照一切法。了達法界一切佛刹及諸衆生壞障礙山。住無礙法。具足成就諸地法藏。修習普賢菩薩所行。」<sup>(24)</sup>との狀況に達し、更に「得聞普賢菩薩名號行願功德諸地。地具地法。地得地次第。地修地住。他境界地持。地共地正道。一心欲見普賢菩薩。……爾時善財。見十種瑞相已。卽作是念。我今必見普賢菩薩。增長善根。究竟菩薩妙行。見一切佛。若見普賢菩薩。得一切智想。一心恭敬。欲見普賢菩薩。爾時善財。卽見普賢菩薩在金剛藏道場。於如來前處蓮華藏師子之座大衆圍遶。心如虛空無所染著。除滅障礙淨一切刹。以無礙法充滿十方。住一切智。入諸法界教化衆生。於一切劫行菩薩行。恭敬供養一切諸佛心無退轉。於衆生中最勝最上。一切世間無能壞者。一切菩薩不能察其智慧境界。具不思議諸妙功德。普觀三世等諸如來。……爾時善財。見普賢菩薩不可思議自在神力。卽得十不可壞智慧法門。何等爲十。所謂於念念中能以一身遍一切刹。於念念中詣一切佛所。於念念中恭敬供養一切諸佛。於念念中一切佛所聞持正法。得一切佛法輪智波羅蜜門。得不思議佛自在智波羅蜜門。得無盡辯智慧法門。得般若波羅蜜觀諸法門。得一切法界海大方便波羅蜜門。得知一切衆生欲性智慧波羅蜜門。得普賢所行智慧波羅蜜門。」<sup>(25)</sup>との狀況が生まれる。普賢菩薩が右手を伸ばして善財の頂を摩でると、善財は一切世界微塵等諸三昧門に達したのである。普賢菩薩の自在神力の奇特を善財は目の当たりにしたのである。普賢菩薩は「我於過去不可說不可說世界海微塵等劫。修菩薩行專求菩提。一一劫中。見不可說不可說世界海微塵等佛。修菩提心。一一劫中。於一切世界。設不可說不可說廣大施會。給施一切。或施妻子城邑聚落頭目髓腦肢節血肉一切身分。不惜壽命。一向專求一切種智。於一一劫。恭敬供養不可說不可說世界海微塵等佛。於彼佛所。出家學道受持正法。未曾生於貪恚癡心。我我所心。樂著生死虛妄之心。輕慢他心。諸障礙心。修不

可壞佛菩提心。未曾忘失。善男子。我所修行菩薩諸行。淨佛世界。教化衆生。長養大悲。供養諸佛及善知識。護持正法。悉捨一切内外諸物。修習世間出世間智。令一切衆生背生死苦讚歎一切諸佛功德。如是等事。於不可說不可說劫中演說。劫猶可盡此諸功德不可窮盡。善男子。我得如是功德具力。諸善根力。樂勝法力。修功德力。觀察諸法寂滅性力。淨慧眼力。佛威神力。諸大願力。大慈悲力。淨通明力。善知識力。得是力故。逮得本性清淨法身。三世不壞。又得無上清淨色身。超出一切世間。隨應化者莫不覩見。遊一切刹無處不至。現自在力見者無厭。善男子。汝且觀我清淨法身。無量劫海行菩薩行之所成就。無量劫中難聞難見。種少善根見聲聞菩薩猶尚不得聞我名字。況見我身。善男子。若有衆生。聞我名者。於阿耨多羅三藐三菩提不復退轉。若見若觸。若迎送若隨行。若見光明若見震動諸佛世界。乃至夢中見聞我者。亦復如是。若思惟念我。若一日一夜。若七日七夜。若半月若一月。若一歲若百歲。若一劫若百劫。乃至不可說不可說世界微塵等劫。若一念念我。若百生。乃至不可說不可說世界微塵等生念我。亦復如是。以如是等世界微塵等諸妙方便。令一切衆生發阿耨多羅三藐三菩提心住不退轉。善男子。若有衆生。聞我修習淨佛刹者。必得往生清淨世界。若有衆生見聞我身。必得生我清淨身中。善男子。汝復觀我清淨法身。」<sup>(26)</sup>と諭し、善財童子が「能自究竟普賢所行諸大願海。不久當與一切佛等。一身充滿一切世界刹等。身等。行等。正覺等。自在力等。轉法輪等。諸辯才等。妙音聲等。方便等。無畏力等。佛所住等。大慈悲等。不思議法門自在力等。」<sup>(27)</sup>の状態に達したことを示す。そして偈で、「譬如工幻師能現種種事 佛爲化衆生 示現種種身」<sup>(28)</sup>「聞此法歡喜 信心無疑者 速成無上道 與諸如來等」<sup>(29)</sup>の句で結ばれている。ここに善財の求道が完了するのである。

今、善財の求道の姿は、単に己がさとりに到達することを意味するのではなく、大衆をさとりへ、もしくはさとりへの道に導くという大乘佛教の教えであり、法然や親鸞に代表される浄土門の救いとは異なるが、經の結語となっている偈が示すように「信心無疑者 速成無上道 與諸如來等」であり、宗教の根源としての信心が強調されているのである。

善財の求道の姿は、ゴータマ・ブツダ<sup>(30)</sup>の学習・修行・苦行などと対比することもできよう。ゴータマ・ブツダの誕生に際してかれを抱き、特相を検べたアシタ仙人は「これは無上の方です、人間のうちで最上の人です。」<sup>(31)</sup>とした上で「この王子は最高のさとりに達するでしょう。この人は最高の清淨を見、多くの人々のためをはかり、あわれむが故に、法輪をまわすでしょう。この方の清らかな行いはひろく弘まらるでしょう。」<sup>(32)</sup>と予言していた。このアシタ仙人のことばの中に類を見ないゴータマ・ブツダの資質が予告されているのであり、文殊師利菩薩

が善財童子を見てその素質のすぐれていることを称讚したことに通じている。

ゴータマ・ブッダは当時の王族の教養として必要な、あらゆる学問・技艺を習ったが、非凡の才を発揮したということが、やはり後代の仏伝のなかに記されている。<sup>(33)</sup>ゴータマ・ブッダの幼少期の生活は「私は、いとも快く、無上に快く、きわめて快くあつた。わが父の邸にはハス池が設けられてあつた。ある所には青蓮華が植えられ、ある所には紅蓮華が植えられ、ある所には白蓮華が植えられてあつたが、それらはただ私のために為されたのであつた。……その私には、三つの宮殿があつた。一つは冬のため、一つは夏のため、一つは雨期のためのものであつた。……」

私はこのように裕福で、このようにきわめて快くあつたけれども、このような思いが起こつた——無学は凡夫は、みずから老いゆくもので、同様に老いるのを免れないのに、老衰した他人を見て、考えこんでは、悩み、恥じ、嫌悪している。我もまた老いゆくもので、老いるのを免れない。自分こそ老いゆくもので、同様に老いるのを免れないのに、老衰した他人を見ては、悩み、恥じ、嫌悪するであろう——このことは私にはふさわしくない、といって。私がこのように観察したとき、青年時における青年の意気はまったく消え失せてしまった。

無学な凡夫は、みずから病むもので、同様に病いを免れず、病んでいる他人を見て、考えこんでは、悩み、恥じ、嫌悪するであろう——このことは私にはふさわしくない、といって。私がこのように観察したとき、健康時における健康の意気はまったく消え失せてしまった。無学な凡夫は、みずから死ぬもので、同様に死を恐れず、死んだ他人を見て、考えこんでは、悩み、恥じ、嫌悪している。我もまた死ぬもので、死を免れない。自分こそ死ぬもので、同様に死を免れないのに、他人が死んだのを見ては、悩み、恥じ、嫌悪するであろう——このことは私にはふさわしくない、といって。私がこのように観察したとき、生存時における生存の意気はまったく消え失せてしまった。<sup>(34)</sup>と回想している。

こうしたゴータマ・ブッダの悩みは善財童子には見られない。ひたすら仏果を得たいとの願いがあるのみであつた。

「また私は、父なるサツカ（浄飯王）が勤めを行なっているときに、畦道のジャンプー樹の陰にすわって、欲望を離れ、不善の事がらを離れて、租なる思慮あり微細な思慮ある、遠離から生じたき喜楽である初禪を成就していたのをよく覚えていた。——これがじつに悟りにいたる道であろう、<sup>(35)</sup>と思つて。」と老病死について深い反省（もしくは瞑想）をするために初禪の技法を習得していたことを述べている。

善財は念仏のその他の技法を師に導かれて習得した。<sup>(29)</sup>

ゴータマ・ブツダは結婚し、子をもうけたと伝えられているが、善財童子は幼くして求道の道に入ったため、結婚はもとより家庭をもつことはなかつた。ゴータマ・ブツダが「無師独悟」で「独覚」の人であったとされるものの、かれもまた「成道」に至るまで「悟り」へと導いてくれる人を捜し求めていたことは、興味深い。善財童子のように師を求めて五十余人の師の教えを受けることはなかつたものの、少なくともその「成道」への過程に、幾人かの師を訪ねている。「ジャータカ」は次のように伝えている。「つぎからつぎへと旅を続け、アーラー・カーラーマとウツダカ・ラーマブツタを訪れて、もろもろの瞑想を行なったが、『これはさとりに至る道ではない』とその瞑想を重視されなかつた。<sup>(36)</sup>」師事するには至らなかつたものの、「さとり」を得るために他者の修行法、瞑想法などを学びとろうとする熱意に燃えていたのである。

アーラーラ・カーラーマとウツダカ・ラーマブツタの実践してる瞑想法にあきたらないゴータマ・ブツダは、ウルヴェーラの地で、六年にわたって大いなる精励につとめられた。かれは「『極度の難行を試してみよう』と、一粒のゴマや米などで日を過ぎたり、また食をまったく断たれたりした。神々が滋養素を毛孔から採り入れようとしたけれども拒まれた。このような断食によって、かれの身体はきわめて痩せ衰え、金色の身体は黒色になり、偉大な人物のもつ三十二の特相が隠れてしまった。また、あるときは、息をとめる瞑想に入つて、たいへんな苦痛にうちひしがれ、気を失つて散策処の端で倒れられた。」<sup>(37)</sup>「偉大な人」は六年間、難行を行なわれたが、それはまるで空中に結び目を作ろうとするような「徒労の」歳月であつた。かれは、『この難行はさとりに至る道ではない』と考へ、通常の食物をとるために、村や町で托鉢した食物を得られた。すると、かれには、偉大な人物のもつ三十二の特相がもとのとおり現われ、身体は金色になつた。<sup>(38)</sup>」と。修行に随行していた修行僧は、苦行をすてたゴータマ・ブツダと見解を異にして立ち去つたにもかかわらず。

「さとり」を得んがために瞑想に耽るゴータマ・ブツダに誘いの手がのびる。この経緯を『スッタニパータ』は次のように語る。

ネーランジャラー河の畔にあつて、安穩を得るために、つとめはげみ専心し、努力して瞑想していたわたくしに、

(悪魔) ナムチはいたわりのことを発しつつ近づいてきて、言つた、「あなたは痩せていて、顔色も悪い。あなたの死が近づいた。

あなたが死なないで生きられる見込みは、千に一つの割合だ。きみよ、生きよ。生きたほうがよい。命があつてこそ諸々の善行をなす

こともできるのだ。

あなたがヴェーダ学生としての清らかな行いをなし、聖火に供物をささげてこそ、多くの功德を積むことができる。(苦行に) つとめはげんだところで、何になるうか。

つとめはげむ道は、行きがたく、行いがたく、達しがたい。」

この詩を唱えて、悪魔は目ざめた人(ブツダ)の側に立っていた。

かの悪魔がこのように語ったときに、尊師(ブツダ)は次のように告げた。――

「怠け者の親族よ、悪しき者よ。汝は(世間の)善業を求めてここに来たのだが、

わたくしにはその(世間の)善業を求める必要は微塵もない。悪魔は善業の功德を求める人々にこそ語るがよい。

わたくしには信念があり、努力があり、また智慧がある。このように専心しているわたくしに、汝はどうして生命をたもつことを尋ねるのか？

(はげみから起る)この風は、河水の流れをも涸らすであろう。ひたすら専心してわが身の血がどうして涸渇しないであろうか。

(身体の)血が涸れたならば、胆汁も痰も涸れるであろう。肉が落ちると、こころはますます澄んでくる。わが念いと智慧と統一した心とはますます安立するに至る。

わたくしはこのように安住し、最大の苦痛を受けているのであるから、わが心は諸々の欲望にひかれることがない。見よ、心身の清らかなことを。

汝の第一の軍隊は欲望であり、第二の軍隊は嫌悪であり、第三の軍隊は飢渴であり、第四の軍隊は妄執といわれる。

汝の第五の軍隊はものうさ、睡眠であり、第六の軍隊は恐怖といわれる。汝の第七の軍隊は疑惑であり、汝の第八の軍隊はみせかけと強情と、

誤って得られた利得と名声と尊敬と名誉と、また自己をほめたたえて他人を軽蔑することである。

ナムチよ、これらは汝の軍勢である。黒き魔(Kanha)の攻撃軍である。勇者でなければ、かれにうち勝つことができない。(勇者は)

うち勝つて楽しみを得る。

このわたくしがムンジャ草を取り去るだろうか？（敵に降参してしまうだろうか？）この場合、命はどうでもよい。わたくしは、敗れて生きながらえるよりは、戦って死ぬほうがましだ。

或る修行者たち・バラモンどもは、この（汝の軍隊）のうちに埋没してしまつて、姿が見えない。そうして徳行ある人々の行く道をも知っていない。

軍勢が四方を包囲し、悪魔が象に乗つたのを見たからには、わたくしは立ち迎えてかれらと戦おう。わたくしをこの場所から退けるとなかれ。

神々も世間の人々も汝の軍勢を破り得ないが、わたくしの智慧の力で汝の軍勢をうち破る。——焼いていない生の土鉢を石で砕くように。

みずから思いを制し、よく念い（注意）を確立し、国から国へと遍歴しよう。——教えを聞く人々をひろく導きながら。

かれらは無欲となつたわたくしの教えを実行しつつ、怠ることなく、専心している。そこに行けば憂えることのない境地に、かれらは赴くであろう。」

（悪魔はいった）

「われは七年間も尊師（ブツダ）に、一步一步ごとにつきまとうていた。しかもよく気をつけている正覚者には、つけこむ隙をみつけることができなかつた。

鳥が脂肪の色をした岩石の周囲をめぐる『ここに柔らかいものが見つかるだろうか？味のよいものがあるだろうか？』といつて飛び廻つたようなものである。

そこに美味が見つからなかつたので、鳥はそこから飛び去つた。岩石に近づいたその鳥のように、われらは厭いてゴータマ（ブツダ）を捨て去る。」

悲しみにうちしおれた悪魔の腋から、琵琶がパタツと落ちた。ついで、かの夜叉は意気沼銷沈してそこに消え失せた<sup>39</sup>。」と。「悪魔の誘

惑」とか「降魔」と呼ばれる一節であるが、さとりへの道に邁進するゴータマ・ブッダはさらにナムチの三人の娘の色仕掛けによる誘惑をも退けている。

善財童子はこうした誘惑の排斥についての記述はない。菩薩として修行に励む姿のみが浮き出されているのである。

本稿では善財童子の成道の最終段階を考察し、併せてゴータマ・ブッダの修行の後を、求師、苦行などに関連して紹介した。

ここで仏教では教育をどのように考察しているであろうか。一つの手掛かりとして、「教育」と漢訳されてきた原語は、パリパーカ (paripaka)、ヴィネーヤ (vineya)、シャーサナ (sasana) などのサンスクリット語が相当するだろう。パリパーカの語根はパー (pa) で、保護する、統御する、顧慮するという意味があり、これにバリ (遍く) の接頭語がついたものである。ヴィネーヤの語根は、ニー (ni) で、連れ去る、案内する、導くの意味で、これに接頭語 (vi) がついて、馴らすという意味になる。シャーサナの語根シャース (śā) は、教える、命令する、調伏する、懲らしめるの意味がある。……

修行の語も宗教上の特殊な教育用語と考えてよい。修行の原語の一つにバーヴァナー (bhavana) というサンスクリット語がある。これは心を定めること、瞑想という本来の意味があり、これを仏教では勤修、数習、薰習という意味で用いている。つまり繰り返し行なうこと、習慣づけることが修行である。これにもっとも相当する用語は戒律の戒である。戒のサンスクリット語シーラ (śīla) には性癖、習性、習慣の意味がある。戒はつまり繰り返し規律を行い、習慣となるまで身に付けさせることを意味する。……

ただ知識を与えるだけでなく、それを身体で慣れ憶えさせるところまでに導くことが教育だとされている。<sup>(40)</sup>

『真理のことば』で「すべて悪しきことをなさず、善いことを行い、自己の心を浄めること——これが諸の仏の教えである(諸悪莫作

諸善奉行 自浄其意 是諸仏教)<sup>(41)</sup>」の語は象徴的に語るものであるが、行動の善悪にまで結びつく知識、つまり智慧の習得を薰習とい

う語で示すものではなからうか。

註

(1) 『大方廣佛華嚴經』(晉經 佛陀跋陀羅訳 六十卷本 以下Aと表記する) 大正新 脩大藏經 九 四六五 下 『大方廣佛華嚴經』 唐經 實又難陀訳 八十卷本 以下Bと表記する) 大正新脩大藏經 卷十一 一〇二 上 『大方廣佛華嚴經』(貞元經 四十卷本 以下Cと表記する) と『ざとりへの遍歴』 華嚴經入法界品 サンスクリット本からの現代語訳 以下Dと表記) は「入法界品」のみであるので該当箇所なし。本稿では晋經を底本として考察した。以下 華嚴經からの引用は九 七六九 下、十八一六 下、下 318と表記する。

- (2) A 九 五五八 下 B 十一 一九四 上 (Bでは「三界所有。唯是一心。如來於此。分別演說十二有支。皆依一心。」となっている)
- (3) A 九 四一〇 下 B 十 B 十三六 中下
- (4) A 九 四五〇 下 四五一 上 B 十八九 下 九〇 上
- (5) A 九 四四九 下 B 十八九 上
- (6) A 九 七六九 下 B 十 四二二 中段 下段 C 十八一六 下段 八一七 上 D 下 318 319
- (7) A 九 七六九 下 B 十 四二二 下 C 十八一七 下段 八一七 上段 D 下 318 319
- (8) A 九 七六九 下 七七〇 上 B 四二二 下 C 十八一七 中 D 下 320 322
- (9) A 九 七七〇 下 B 十 四二四 上 C 十八一九 上 D 下 328
- (10) A 九 七七二 上 中 B 十 四二八 中 下 C 十八二三 中 八二四 上 D 下 352 354
- (11) A 九 七七二 中 B 十 四二八 下 四二九 上 C 十八二四 上 D 下 354 355
- (12) A 九 七七二 下 七七三 上 B 十 四二九 上 中 C 十八二四 下 D 下 357 358
- (13) A 九 七七三 上 B 十 四二九 中 C 十八二四 下 D 下 358
- (14) A 九 七七三 中 B 十 四二九 中 C 十八二五 上 D 下 358
- (15) A 九 七七五 中 七七六 下 B 十 四二九 中 下 C 十八二五 上 八二六 中 D 下 358 363
- (16) A 九 七八〇 中 B 十 四三四 下 C 十八三一 中 D 下 384
- (17) A 七八〇 中 B 十四三五 上 C 十八三一 中 D 下 384
- (18) A 九 七八〇 中 七八一 中 B 十 四三五 中 四三六 中 C 十八三三 中 八三三 上 八三三 中 D 下 387 394
- (19) A 九 七八一 中 七八二 上 B 十 四三六 中 四三七 上 C 十八三三 中 八三四 中 D 下 394 399
- (20) 十喻 (A 九 七八二 上 中 B 十 四三七 上 下 C 十八三四 中 八三五 上 D 下 400 403 具体的には一、夢に山海を見る喻で、善財の妄を超えて勝れた境地を見ることに喩え、二、臨終業現の喩えで、難思の冥に現ずることに喩え、三、非人所持の喩で、加持して勝れた法を見させることに喩え、四、龍宮流入の喩えで、長劫を須臾というように喩え、五には寶藏廣現の喩えで、一の中に多事を現すことに喩え、六には遍處定境の喩えで、勝境心に随って現われることに喩え、七には軋城無礙の喩えで、所見の無礙法に喩え、八には昇天見人の喩えで、所見の法に於て、自在を得ることに喩え、九には大海に三千世界を見るように、所見の明了の徳に喩え、十には幻現無礙の喩えで、威力による奇

怪事を現する喩えが列挙されている。

- (21) A 九七八二 中下 B 十四三七 下四三八 中 C 十八三五 上下 D 下 403 405
- (22) A 九七八二 下七八三 中 B 十四三八 中四三九 上 C 十八三五 下八三六 下 D 下 405 410
- (23) A 九七八三 下 B 十四三九 中 C 十八三六 下 D 下 411
- (24) A 九七八三 下 B 十四三九 中 C 十八三六 下八三七 上 D 下 411 414
- (25) A 九七八三 下七八五 上 B 十四三九 下四四一 上 C 十八三八 中八四〇 中 D 下 414 423
- (26) A 九七八五 上 B 十四四一 中四四二 上 C 十八四〇 下八四一 中 D 下 424 428
- (27) A 九七八五 下七八六 上 B 十四四二 中 C 十八四二 上 D 下 428 429
- (28) A 九七八七 下 B 十四四四 下 C 十八四二 上 D 下 434
- (29) A 九七八八 上中 B 十四四四 下 C 十八四八 中 D 下 438
- (30) ゴータマ・ブツダという呼称は仏教の開祖の生涯を通じて用いられる呼称である。釈迦牟尼もしくは釋尊が成道したゴータマ・ブツダを指す呼称としてもちいられるが。また彼の名であるとされるシッタータ(悉達、悉達多、悉多太子)はその語義が「目的を達成せる」「義を成せる」であり、原始聖典に現われてこないのが後代の仮託ではないかとの疑いをもたれるとされる。(中村 元『釈尊の生涯』23頁および30～31頁を参照した。)
- (31) 『スッタニパータ』690偈 (『スッタニパータ』の訳本は中村元訳『ブツダのことは』を用いた。)
- (32) 『スッタニパータ』693偈
- (33) 中村元『釈尊の生涯』44頁
- (34) 中村元『釈尊の生涯』44～46頁
- (35) Majjhima-Nikaya No.36 Mahāsaccaka-sutra Vol I P246 中村元『釈尊の生涯』48頁より重引
- (36) 『ジャータカ』序 (『ジャータカ全集』I) P77
- (37) 同上
- (38) 『ジャータカ』序 (『ジャータカ全集』I) P78
- (39) 『スッタニパータ』425～449偈
- (40) 田上太秀氏は『仏陀のいいたかったこと』(講談社学術文庫 1422)の234～235頁で「仏教の『教育』用語」と小見出しを付けて考察されており。田上氏は「教育」の語を単に education にのみ求められている。教育学には疎遠な田上氏は、おそらく教育学で education (陶冶。人格形成) と知識・技能の教授 (teaching, instruction) が峻別されていることを存知ではなかったらしい。かれが取り上げた education に該当するサンスクリット語は paripāka, vineya, śāsana であり、修行の原語として bhāvanā と戒の原語としての śīla を取りあげられている。公開されている English-Sanskrit Dictionary (Ape English Sanskrit Dictionary Query) に与えられた education の訳語としては
- s. vi-ṛayaḥ, śikṣhaa-śhaNaM, adhyaapaṇaM, anuśhaṣaṇaM, saMskaraḥ, vidyaadaanaM-grahaNaM-praaptiḥ, vyūpattiḥ, upadeshaḥ.

2 poShaNAM, saMvārḍhanam.

Teaching の訳語として

s. adhyaapanam, shikShaa`kShaNAM, upadeshaH.

Instruction の訳語として

s. upadeshaH, shikShaa`kShaNAM, vinayanaM, adhyaapanam, shaasanaM, bodhanaM.

2 vidhiH, niyamaH, suutraM, kalpaH.

3 aaj`naa, ni`aa`deshah, shaasanaM, niyogaH.

が掲げられている。(引用の表記は ITRANS による表記)

上記の訳語からも知られるが education や instruction, teaching が区別されていることが言えるであろう。

(41) 中村元訳 『真理のことは』188頁およびその註

蛇足ではあるが、私が『華嚴經と教育』の考察を本学の論集に発表した後に、故米山俊直学長は「君、司馬遼太郎が何かで華嚴を取り上げていたはずだよ。一度精読してください」と声を掛けて頂いた。司馬は『華嚴をめぐる話』というエッセイを発表している。この考察で少しでも故米山学長の学恩に報いれば幸甚である。